

家族の個人化と死生観

伊野真一

1. 問題意識

近年、従来の様式にとらわれない葬式を行ったり、あるいは、葬式を行わないことを選択する人々が増え、また、血縁・地縁を超えての合祀墓がつくられたり、散骨など墓そのものを拒絶するなど、葬送の自由が唱えられるようになってきている。こうした葬送ブームの背後には、日本の旧来の葬送において中心的役割を担ってきた家族が変容を遂げているという社会的要因が見え隠れしている。ここでいう家族の変容とは、家族の個人化であり、それは第一に家族構造の変化（核家族化、未婚・非婚化、少子化、子どもをもたない選択をする夫婦・離婚・事実婚・シングルマザーの増加など）を、第二に、夫婦別姓の要求など、家族役割の遂行よりも個人の自己実現を重視する傾向、意識のうえでの個人主義の進展を意味する。こうした家族の個人化に従来の葬法が対応できない現実がある。葬送の変化は、家族構造が変化すればそれにつれて変化するという従属変数の関係にあたるのではないだろうか。

これまで一個人の死は、私個人が考えるものではなく、その遺族や子孫が考えるべき問題であった。しかし、死を家の枠組みのなかに閉じ込め、死について考えることを怠ってきた私たちは、家族の個人化という社会の変容を経験することによって、自分自身の死と否応なく向き合わざるをえなくなりつつある。そこで、皆婚規範や家規範から外れた人々が、葬送の方法を選択する過程で、どのように死生観を構築していくのか、あるいは再構築していくのかについて、インタビュー調査をもとに明らかにしたい。そのうえで、

それらの人々にとっての葬送の現状や問題点を把握し、先行研究の知見を踏まえながら、今後の課題を展望してみたい。

2. インタビュー調査

2.1. 調査の概要

今回の調査の概要に触れる前に、参照しなければならない先行研究として、松本（中筋）由紀子の葬送に関する調査がある。松本は、1995年に、1990年代に入って生まれた、ふたつの新しい葬送のあり方を求める団体の会員へのインタビューを行っている（松本 [1996] 中筋 [1998]）。ひとつは、社会学者・磯村英一が1990年に創始した「もやいの会」である。行き倒れになっていた老婦人が亡くなり、その遺体が無縁仏として合葬され、墓誌には何も刻まれなかったという事態に遭遇した磯村が、そのことに憤りを感じ、その体験をもとに、のちに設立したのが、この会である。この会は、血縁や地縁を超えた生前のコミュニティを目指し、会員のための合祀墓をもっている。もうひとつは、「葬送の自由をすすめる会」であり、焼骨を粉にして海や山に撒く葬法である散骨、いわゆる自然葬を推進する団体である。墓地造成に伴う環境破壊や墓地不足などの問題に対処しながらも、死後の自己決定権を主張している。

松本の研究において、家墓を担う人々さえ、その継承が困難であり、家墓を持たない人々は、自身の墓を創設し継承させることも困難であるという現実が指摘されている。家墓の継承者としての責務を負った人にとっては、自分ひとりの死後のみを自己決定できる立場にない人も多いが、「もやいの会」では、家の先祖を合祀墓に納める会員もいる。松本の分析においては、いずれの会も、団体の本来の目的はともかく、特別に革新的な意識からというよりは、余儀ない事情によって、新しい葬法を求める人々の現実が浮き彫りにされている。

今回のインタビュー調査は、2005年7月から12月にかけて行われた。その対象は、家族の個人化がいつそう進展した10年後の現実であり、調査対象者は、先に列挙されたような家族の個人化という現象になんらかの点で合致す

る人々（16名）に限定されている。年齢は、30～50代と、松本の調査と比較して調査時点での年齢が比較的若い¹⁾。年齢構成は、30代が2名（Aさん、Bさん）、40代が7名（Cさん、Dさん、Eさん、Fさん、Gさん、Hさん、Iさん）、50代が7名（Jさん、Kさん、Lさん、Mさん、Nさん、Oさん、Pさん）、計16名である。調査対象者は、特定の団体の会員ではなく、葬送に関する勉強会やシンポジウム、知人の紹介を通じて知り合えた人々であり、さらには、調査対象者に次の対象者を紹介してもらったこともあった。世代的にみれば明らかのように、親の葬式を出した経験がある人が数名おり、親の希望通りの葬送が周囲の近親者の反対のために実行できなかった苦い経験をもつ人もいた。

家族の個人化という観点から、対象者の属性を分類してみると、以下の通りである。既婚女性6名（子どもが娘のみがHさん、Jさん、Lさん）（子どもがいないのが、Iさん、Mさん、Pさん）、事実婚女性Aさん、独身女性6名（未婚が、Dさん、Eさん、Nさん、Oさん）（離婚経験者がCさん、Gさん）、独身男性3名（離婚経験者がKさん）（ゲイ男性がBさん、Fさん）。なお、墓は男子が継承すべきだという規範が強く、また、嫁いだ娘に実家の墓の管理をさせることに抵抗感をもつ親が多いことなどから、子どもが娘か息子であるかは重要な属性となりうることを指摘しておこう。

死生観の構築の複雑なプロセスは、定型の質問を行うアンケート調査では見えてこないはずであり、インタビュー調査が適切であると考え、それぞれ2～3時間かけて行った。その際、いくつか質問すべきポイントを聞き逃さないようにしながらも、できるかぎり自由に語ってもらった。

2.2. 事例分析

まず、重要な論点が出揃うような、典型と考えられる二つの事例を紹介したい。

2.2.1. Cさん（49歳・独身女性／離婚経験あり）

3年半前に乳がんになったのを機に、自分自身の死後のことについて考えるようになった。それまでは、自分の死について真剣に考えることはなかつ

た。そもそも、弟が実家の墓は継ぐだろうし、バツイチだということもあって、実家の家墓に入れてほしいとは言いにくかった。

岡田信子『散骨代とお駄賃を残しておきます』など、葬式や墓に関連する本を読んだり、講演会や勉強会に参加して、情報を収集した。いろいろな選択肢を自分なりに考えてみた。お寺の永代供養墓はお金がかかる。お金は、いざというときのために、なるべくとっておきたい。手術を行ってから、もう3年半経っているので、がんの再発はもうないのではないかと思っているが、まだまだわからないし、老後のためにもとっておきたい。独身女性が入る共同墓地や、その他の共同墓地も考えたが、仕事で忙しいこともあって、生前からのつきあいが面倒そうに思えるし、会費もかかる。平凡な人間なので、墓碑に名前を刻みたいとも思わない。散骨も、それなりにお金や手間がかかる。遺族のない自分には 散骨は誰かの手をわずらわせることになるので躊躇してしまう。こればかりは、友達には頼みにくい。やっぱり、そういうことを頼めるのは家族なんだと思う。

結局、献体がいいのではないかと思い、献体を斡旋する団体にコンタクトをとって、献体登録を済ませた。家から近い大学病院を選んだ。人の役に立つというのは、やはり嬉しい。いちおう慰霊祭があって、供養もしてくれるようなので、ひとまずは安心した。「献体したい」と弟に話したら、最初は反対された。私のことを不憫に思ったのかもしれない。でも、今は理解してくれている。「人の役に立ちたいんだから、いいでしょ？」と言ったら、わかってくれた。

自分の葬式に関しては、やらないでほしい。人がそんなに多く来ることもないだろうし、みじめなものになると思う。私と同じ病気（乳がん）で死んだ母の葬式は、実家が商売をやっていたので、その関係で人は多く参列してくれたが、業者まかせの、そっけない葬式だった。葬式は、自分がこうしたいとか、日頃からよく考えておかないと、いざというときに、うまくいかないと思った。「私の葬式はしないで」と弟に言ったら、反対された。「献体はいいが、それはできない。葬式をしないわけにはいかない」と怒られた。

漠然と靈魂の存在は信じていたけれど、まあ、死んだら魂は終わりなんじゃないかなあって最近思う。だったら、迷惑かけないようにしておくのが一

面白い。自分の後始末は自分でつけたい。「困ったちゃん」っていうか、お荷物みたいに思われるのは嫌だし。遺体の引き取り手がないまま、自治体がゴミを取りに来るように、遺体が処分されるのは嫌。見栄っ張りかもしれないけれど。独身の人のために公的な墓地のようなものももっと身近にあればと思う。きっとそう思う人は多いと思う。

死後のことを決めてから、不安に思うこともなく、清々しい気分になった。精一杯生きていこうって、今は思う。病気をしなければ、自分の死後のことを考えるのなんて、もっと先に延ばしていたと思うし、おそらく離婚していなければ夫の家の墓に入っていたと思う。

2.2.2. Jさん (54歳・既婚女性／一人娘あり)

仕事を続けながら、娘を育ててきた。仕事と家事を両立させながらやってきたが、どちらも中途半端なものに終わってしまったように思う。性別役割分担には異議ありだが、夫は少なくとも同年代の男性に比べれば、それなりに育児に協力的だったかもしれない。フェミニズムに関心があり、働く女性として夫婦別姓の主張に共感している。嫁として嫁いだ先の「～家之墓」に入らなければいけないというのは、やはり違和感を覚える。ただ、よく聞くように、夫と一緒にの墓は嫌だとか、そこまでは思っていない。ただ、夫が次男でもともと墓がないので、改めて墓を購入するよりは、他の方法を考えたかと思っている。かといって、主人の実家の墓に入れてもらおうとも思わない。故郷を離れて、東京で生活しているのだし。

実家の母が、女優の沢村貞子さんが散骨をしたというのを聞いて、「生きている人たちのための土地をお墓で奪っちゃいけない。散骨にしてほしい」と私にそれとなく言っていた。母が亡くなったときに、父に言ったら、反対された。結局、母は家墓に入った。実家のことには口を出せないし、なかなか思ったような葬送を周囲の者がしてあげるのも難しいということがわかった。

母の葬式は、ごく普通のありきたりのものだった。いろいろな葬式に出席したが、心のコもった葬式っていうのは、なかなかない。派手なのは、社会的対面を重んじてばかりいるようで、どうも苦手である。戒名にお金がかか

るのも納得できない。身近の尊敬する人が、質素な葬式をしたり、葬儀をしない人がいたりして、むしろそちらに関心がある。できれば、私の葬式もしないか、家族や親しい人を中心とした質素なものにしてほしい。でも、もし夫が先立つのなら、夫の葬式は心のこもったものにしてあげたいと思う。

やはり、母の影響もあってか、散骨がいいなあと思う。さりげなく海に撒いてほしい。のんびり広い海の中で眠りたい。主人か娘に、どこかに旅行に行ったときにでも撒いてもらいたい。よく考えてみたら、自然のなかに溶けるように消えていくような感じは、心地よいし、生物としての人間のあるべき姿のように思う。小さいときに、あの世ってあるのかなあとか、死んだら魂はどうなるのかなあって思ってたけど、今は、そういう話はどうでもいい。

娘は一人っ子だが、娘が結婚する相手ももし一人っ子だったら、その人の家の墓もあるだろうし、いま私たちが無理に墓をつくってしまうようなことは絶対にできない。管理が大変。ずっと独身かもしれないし、仕事の関係で海外生活を送る可能性も高い。負担をかけるのだけは嫌だ。私は友達とワイワイ楽しくやるのが好きだから、共同墓地もいいが、娘たちに「墓参りをしろ」と強制しているようで嫌だ。逆に、参ってもらわなくていいんだったら、墓は必要ないと思う。位牌や仏壇も処分に困るし、娘にとっては負担になるのではないかと思う。あまり迷惑をかけたくないとばかり言うと、娘からは、水くさいと言われるが、散骨自体は、「お母さんらしい」と賛成してくれる。娘に私の生き方を理解してもらいたい。いまでは、娘も、自分が先に死ぬようなことがあれば、散骨してもらいたいと言っている。主人は墓に入るかどうか、まだ決めかねているが、かなり散骨に傾きかけているように見える。まあ、この問題は、慌てて考えなくても、もうちょっと先延ばししてもいいかなあって思う。でも、いずれ、きちんと決めておかなきゃいけない。無責任に娘に放り投げるのだけはやめたい。

2.3. 調査内容の分析

以下では、このふたつの事例を含めながら、調査結果をいくつかの論点に絞って分析したい。

2.3.1. 葬送の選択と死生観

墓そのものをもたない葬送のスタイルである散骨は、基本的人権のひとつであるべきとされる「死後の自己決定権」の対象として主張される一方、環境問題の視点から「自然葬」と命名されることがある。その所以は、墓地造成に伴う環境破壊の防止、骨が海や山に撒かれることによる人間の自然回帰が強調されることにある。このような自然葬を提唱する人たちが、それは日本古来の伝統的葬法であり、日本人の伝統的な死生観に合致するものだと強調するように、葬送の選択の根拠を死生観に求めることは多い²⁾。

しかし、葬送の担い手や墓の継承者を確保できない人たちは、必ずしも特定の死生観から葬送の選択を行っているのではないことが調査から明らかになった。現実的な対応を迫られた結果、他人に迷惑をかけない、合理的で経済的な葬送を選択し、その葬送に適合的な死生観を構築しているに過ぎない場合がある。上記のCさんやJさんもそうだろう。「遺灰を撒かれた場所の近隣の人の気持ちを考えれば、気分を害する人がいるだろうから、献体して大学病院で埋葬してもらうのがいい」と言って献体を選択するOさんも「死んでから社会に貢献できるのは嬉しい」と言っている。そのOさんは、そもそも小さいときからよく先祖のお墓参りをしていたとのことで、先祖は大切にしなければいけないし、お墓に魂が宿るとなんとなく信じていたようである。しかし、その死生観は、あるひとつの葬法に固執しなければならないほど、Oさんにとっては強固なものではない。

また、「人は死んだら自然に還るのが自然」(Pさん)「生きている人の場所を死者が占領するのはよくない」(Mさん)と語ったり、献体の場合であれば、「死んでから世の中のためになりたい」(Eさん)と語る場合、それらは、自己の選択を他者に説得的に説明する大義名分となる場合もある。先に紹介したCさんも、「人の役に立ちたいんだから、いいでしょ?」と言って弟を説得している。ちなみに、献体の場合、遺骨を返還無用としておけば、各大学の墓地に埋葬されるから、単身者の献体希望が増えている。

もともと持っていた死生観から特定の葬送が選択されたのか、あるいは、ある葬送の選択をした結果、特定の死生観を持つに至ったのか、どちらが先かといった因果関係を問うことが重要なのではない。そもそも、葬送の選択

肢の中からどれを選択するかにおいて、その人がもともと、その葬送に見合う死生観を持っていたのかどうかは、正確に検証することなど不可能である。重要なのは、葬送の実現可能な選択肢の中から、現実的な問題を考慮に入れながら葬送を選択し、自分自身を納得させるようなかたちで、ときには他者をも納得させることができるような、自分なりの死生観をつくりあげているということである。

2.3.2. 家墓規範

家単位の墓はそれほど古いものではなく、民法施行以降の明治期に普及している（田中 [2003:208]）。それは、祖先祭祀を家督相続の特権として法制化した明治民法によって、それまで庶民にはほとんど無縁だった家規範が国民全体に広められたことによると言われる。このように、そもそも家墓が主流になったきっかけは、制度上あるいは規範上の要請からであった。家墓とは、森謙二によれば、墓碑に「～家之墓」と書かれ、火葬骨となった家族が一緒に納められる墓の形態である（森 [1993:20]）。松本由紀子は、日本近代の「家の墓」という規範意識の内容として、以下の三点を挙げている（松本 [1996:217-218]）。第一は、死後の靈魂の存続、あるいは死後の世界の想定であり、第二は、死者の死後の在り方が生者の祭祀によって維持されていたこと（つまり「家」とは心的に保全すべき生者・死者を併せた集団の範囲とされていた）、第三は、祭祀し、あるいはされる権利＝義務が、家の特定の成員＝直系の嗣子に限定されていたことである。さらに松本は、これを規範意識というのは、これが制度として規定された明治期以降において、実際に常態として十分に実現されていたか否かは別として、一つの価値として人々に指向されていたものであると考えられるからだとしている。

血縁者が祭祀責任を背負わなければならないとするのは、公領域と私領域を分断し、家族を私領域に排他的に割り当てた近代家族の規範であり、「死んでもなおも続く家族の愛情」という規範そのものである。たとえば、夫の墓に入りたくないとする既婚女性が、家族の愛情と抑圧の象徴である家墓を拒絶するのは、近代家族への違和感の表明であり、家族からの象徴的な次元での解放を求める生き方の選択を意味している。家族からの解放を求める

ときに墓が操作の対象となるのは、田中藤司の表現を借りれば、墓こそが家族の愛情と抑圧を表現しているからに他ならない（田中 [2003: 213]）。家をめぐる封建的な因習が色濃く出る葬式を拒絶するのも同様だろう。

逆に、調査では、同性愛カップルが一緒に墓に入ることを熱望している場合もあった（Bさん）。これは、墓をともにすることが、愛情のひとつの表現であることの証左である。婚姻関係にないカップルの場合、共同で墓地を購入しても共同名義にすることができない場合や、そもそも親族しか埋葬できないとする墓地も多い。

家墓は、家制度が制度上は解体された現在においても、家の象徴であり続けている³⁾。いまだに長男が家墓を継ぐものだという規範は強固に存在する。しかし、家族構造の変化は、現代の日本社会で主流である家墓の継承を困難にさせる。事実、墓の継承者がいない人は、墓の管理料収入が見込めないため、墓地を売ってもらうこともできず、男子にしか墓地の継承権が認められないとする墓地もかつてはあった。夫婦別姓を希望するような女性にとっては、家墓規範は桎梏でしかなく、ある独身女性は、兄夫婦が継ぐ家墓に入りたいとは言いにくい状況を率直に語っている（Dさん）。先に紹介したCさんも、弟が継ぐ家墓には入りにくいようである。

また、少子化の趨勢のもとでは、一人っ子同士の結婚が増える。一人っ子の娘が一人っ子の男性と結婚していて、家墓を継がせて管理させることが不可能であると語る人もいた（Lさん）。同じく娘がすでに嫁いでいて、娘の墓は嫁ぎ先にあるらしいが、自分たちの墓がなく、たとえ墓を造ったとしても継承者がいないHさん。家墓を継がなければならない男性が未婚の場合（Fさん）。自分では散骨を希望するが、家の墓をどうするかで悩んでいるMさん。実家の墓に入るわけにはいかないし、かといって、いまの嫁ぎ先の家の墓に入るのは気が乗らないIさん。家墓の継承の責任のない、つまり直系の家ではない場合に、世間体を考えて墓ぐらい購入しなければと思う反面、必要ないと思う自分の素直な意思に従って決めたいというPさんは、わざわざ家墓を購入するということの背後に、自分の子孫に先祖として崇拜されたいという欲望を感じ取るという。

以上見てきた通り、家墓規範はいまだに存在しているが、その理念を実現

していくには、われわれは様々な困難に直面しているし、その分、家規範への反発も強い。と同時に男性と女性では、墓は非対称に問題を投げかけ、ときに女性にとっては差別的に働くことがある。井上治代の指摘によれば、新潟県巻町の妙光寺にある承継者を必要としない墓「安穩廟」の申込者の中に、「子どもが女子だけのケース」「女性の離婚者」「未婚の女性」はいるが、同様の「子どもが男子だけのケース」「男性の離婚者」「未婚の男性」は皆無であった（井上 [1998: 235]）。これは、男子がいれば墓は継がれ、子どものいない離婚・未婚者でも男性であれば「ウチの人間」として実家の墓に入れてもらえるからである。このように、既存の墓に入れてもらえない人、入りたくない人たちが購入している新形態の墓の調査結果からも、家意識を残した既存の墓が、いかに女性を差別しているかをうかがい知ることができると井上は主張する。

2.3.3. 遺体や遺骨へのこだわりと死生観

家墓に見られる祖先祭祀が、制度上・規範上の要請からであったとしても、その一方、祖先祭祀を通じて、祖先との連続性のなかで自己の存在を確認し、遺体の存在をそれとなく意識する（遺体の存在は完全に隠されるものではなく、それとなく周囲に知らされ、遺体の存在は意識されている）死者儀礼を通じて、われわれは、死者とのコミュニケーションをとり、霊魂と身体の関係を認識し、われわれの死生観が形成されてきたのも事実である。波平恵美子は、死者儀礼のなかでの身体が担う役割に注目する（波平 [2003, 2005]）。われわれは、死者の身体を拭く、身体の向きを変える、遺体に供え物をするなど、死者儀礼のなかで死者の身体に様々な働きかけを行ってきたのである。われわれの死生観は、社会構造や社会意識の変化、および、それを反映した儀礼の様式を通じて形成されていると言えるのではないだろうか。

墓参りが遺体や遺骨が存在する場所への訪問であることを考えると、死者儀礼は死後時間を経ても身体にかかわって行われる。火葬場で遺骨を拾うほか、戦没者や事故死した人々の遺族が現場に向向いて遺骨を拾うように、日本人は遺体や遺骨にこだわりが強いのだと語られることが多い⁴⁾。しかし、散骨の際に遺骨を跡形なく粉碎し、自分の周囲に置かない人々や、死後自分

の遺骨が生き残った人々の間に残されることを拒む人々の増加を踏まえれば、墓や遺骨だけに魂が宿るという考えや、それらの存在こそが生きた証そのものであるといったような考えは、いくぶん修正されなければならないだろうし、少なくとも遺体や遺骨へのこだわりは薄れつつあると言える。

靈魂やあの世の存在を信じるか、あるいは靈魂と身体の間をどのように考えているかといったような問いは、自分自身の死後の後始末を深刻に悩む人々の前では、調査実践のコミュニケーションの際、ときに空疎に響くことがあった。しかし、「正直、死んだあと、いろんな人と一緒にいるのはつらい。ひとりでのんびり過ごすのが自分らしい」(Nさん)「自分の好きな場所か故郷で散骨してもらいたい。花が好きなので、樹木葬(花木などを墓標にする)もいい」(Mさん)と生前の感覚で墓が死後の住まいであるかのように語られるが、それが違和感なく聞こえるのも、われわれが、靈魂や遺体・遺骨を、なんらかの形で意識し、そのような類の会話を慣習的に繰り返しているからであろう。そうはいうものの、そのような靈魂や遺体・遺骨に対する意識は、今回の調査のうへでは、信仰や信念と呼ばれうるほど、葬法の選択を拘束する力を持つほどのものではない。

家族の死に際しては、「葬式を出すのが家族にとっての責務である」(Lさん)とか、「ちゃんと供養しないと、バチがあたりそうで怖い」(Gさん)というように語られる。その一方、自分自身の遺骨に関しては、「ただのモノとして扱われてもいい」(Fさん)や「自分自身の遺骨はそのまま火葬場で処分してほしい」(Kさん)とこだわりがない人がいた。

2.3.4. 葬式への批判

中筋由紀子の指摘によれば、「葬送の自由をすすめる会」の会報での投書コーナーに多いのが、従来の葬儀や墓に対する批判である(中筋[1998:102])。それは、従来の葬儀や墓のあり方が、自分にとって意味が見いだせないものであるのに、従わなくてはならない拘束力を持っている、という点においてなされるものが多く、このような儀礼の拘束力とは、家の拘束力であると捉えられている。そして自然葬は、このような家の慣習の拘束力とともに、それに強要される人間関係のしがらみから逃れる手段と位置付けられ

ている。旧来の葬送システムに対する閉塞感、葬送のシステムが家の枠組みに閉じ込められ、また葬送の領域が市場原理に侵されてきたことから解放されたいという期待がそこにはある。散骨はその閉塞感を打破する一つの方法であったに違いない。散骨が支持されるのは、死生観の変容（そのような現象があったとして）という要因だけでは説明がつかない。

今回の調査でも、葬式に関しては、「弔問客がちよくちよく訪れるのはかえって面倒なので、葬式をやった方がいい」（Iさん）という意見の他は、旧来の葬式や、その商業主義的なやり方に関して、「義理の参列者が多い」（Aさん）「葬式は世間体のためにやっているように思える」（Bさん）「葬式を盛大にやるにも家族や親戚が少ないので盛大にやれない」（Eさん）「葬式や墓をどうしたいとかなうのは、遺族のある人の特権であると思う」（Dさん）など概して批判的に捉えている人が多かった。しかし、だからといって、その人なりの葬式を行うことの自由やその意義を否定する人はいなかった。「自分なりの供養の仕方でもいいと思う」と語る人（Mさん）、喪失体験からの回復において葬式が果たす役割を強調する人もいた（Lさん）。

ただ、慣習によらない葬式をすることの困難を語っている人がいたが（Pさん）、こうした状況において、「無宗教で祭壇もいらない、死衣もただの浴衣で等、ほとんど従来の葬儀とは違ったものとなり、『これでいいのかなって思った』けれども『もやい』の代表の人が『構わないです。本人の意思を尊重して下さい』って言ってくると安心して決めることができました。（中略）有名人とか芸能人ならそういうことも認められるけど、わたしたち一般の人間にはなかなか難しい」（松本 [1996: 221]）という「もやいの会」の会員の語りに見られるように、葬送のひとつの選択肢とその情報を提供しているだけでなく、タブー視されがちな行為を精神的に支援する「もやいの会」のような団体の意義は大きい。

2.4. 小括

調査対象者は、病気、身近な親族の死、定年退職前など、その人なりのきっかけで、自分の死について考え、なかなか従来の葬儀や墓などの葬送では対処できないため、とりあえず、自らの現状を直視した上で、その解決策を

可能な選択肢の中から模索し、現実的な対応を考えている。家墓の継承者の存在が確保できる人々にとっては、考える必要もない問題かもしれない。しかし調査対象者は、その死との向き合い方のなかで、生き方そのものを再考しているように見えた。それを契機として自らの生をポジティブに捉えなおしているのである。死を考えることで、清々しい気分になって、精一杯生きていこうと思ったというCさんがその好例だろう。

「葬式も生き方もなるべくシンプルにしたい」(Iさん)と語る人もいた。当初は、現実的な必要性から、葬式や墓のことを考えなければいけなかったとしても、「自分がどう死ぬのか、どう死にたいのかということをいろいろ考えることによって、どういうふうに人生を送りたいのかを真面目に考えるようになった」とIさんは語っている。どのような葬送を選択するかは、ライフスタイルや価値観の表明であると言える。葬儀や墓などの葬送も一個人の人生の一部という意味で、生き方の選択を意味している。しかし、さらに、ここでの含意は、それ以上の意味をもっている。自分がどういう人間なのか、何を大切に生きているのか、これからどう生きていきたいのかを、親族をはじめとした親密な他者に語りかけ、ときには彼らを説得し、自分自身にも言い聞かせているのである。そのコミュニケーションのやりとりのなかで、ときおり、親密な他者への心遣いを垣間見せながら、他者との関係性の再構築を模索している。Cさんは弟との、Jさんは娘とのコミュニケーションのなかで実践していた。Jさんは娘に「私の生き方を理解してもらいたい」と言っている。自分の死後の始末をどうつけるのかという、「死後の自己決定権」を考えることは、とりもなおさず、よりよく生きるための行為なのである。

この際の「死後の自己決定権」とは、ひとりよがりの瘦せ細った概念ではない。今日、尊厳死をめぐる問題に代表される「死の自己決定権」は、その概念は再検討され、他者との関わりをなかで考えなければならぬ、錯綜した概念となっている。それと同様、「死後の自己決定権」も、死後の行末を自分で決めておく必要性に迫られる人にとってさえ、自分ひとりが勝手に自由に決めていいことでは決してなく、周囲とコミュニケーションを図りながら、ときに周囲の了解を得て決定しなければならないのである。お互いに他者の望む死を想像することは、多様な他者との共生に通じるだろう。

3. 結び

以上見てきたような、家族の個人化がもたらす日本人の死を取り巻く現実を直視した上で指摘しなければならないのは、どんな死後についても想像できるような、いわば死後の選択肢が確保できる環境の整備だろう。最後に、より実践的な課題を提示してこの論考を終えたい。

近代日本は、一個人の死を、家族という私領域に閉じ込めてきたが、公共性にかれる必要があるだろう。これは、公共的に死について考えることを要請すると同時に、墓地に限らず、なんらかの公的な納骨施設のような物質的な環境の整備をも要請する。

ケアという概念がいま注目されている。しかし現実的には、ケアとは、あくまでも生きている人のためのものであり、死後は、医療や福祉サービスの対象からはずされる。介護や育児などが社会化されるように、いま家族の中だけで死者をケアしていくことは困難になりつつある。国家や地方自治体における死後のケアのシステムが模索される必要があるだろう。従来の葬法では対処できない現実を抱える人にとって、万全とまではいかないが、最低限必要な環境が日本に整っているとは言いがたい。調査対象者に少なからず見られたのは、やはり、選択にあたっては妥協しているということである。

死後のケアを考える上で、興味深い事例を紹介したい。家族によらない公的な老人介護が充実する福祉国家スウェーデンで、死者に対するケアが実践されつつあるのである。スウェーデンでは、墓の管理・継承の問題を解決する方法として、経済的負担が一切かからないミネスルンドという共同の匿名墓地が普及している。このシステムにおいては、公園のような共同墓地のどこに死者が埋葬されているのか遺族でさえわからず、遺族はただ共同墓地全体に祈りを捧げるのである。このような血縁を超えて、すべての死者を祀るという精神が、家族の枠を超えた福祉サービスの実践を下支えしているのではないかという指摘がある。たとえば、大岡頼光の研究がそれである（大岡[2004]）。この解釈をどう評価するかはともかく、死後のケアのシステムのひとつの例として参考になるだろう。

しかし、その一方、興味深いことに、スウェーデンでミネスルンドが普及

していくのとほぼ並行して、バランスをとるかのように、ある祝日における墓一般への灯火の習慣が浸透してきたという。ただし、これは、家墓にみられるような祖先祭祀ではなく、親密な関係にあった死者に対する個人的なメモリアル・追憶である。このような傾向は、日本において、近年、自分らしい葬儀のあり方を考える人々が増えている事実と符合し、今回の調査でも少なからず見られた。「たまに、死んだ人のことを考えてあげられるようになりたい」(Aさん)「自分なりの供養の仕方でもいい」(Fさん)「その人独自の追悼の仕方があっていい」(Eさん)「親しい人の心の中で存在できればいい」(Dさん)「墓をもたない散骨であっても、海や山を見るたびに故人をしのぶこともできる」(Mさん)などである。祖先祭祀という規範は緩みつつあっても、それは、親密な他者を悼む儀礼を否定することを意味していない。

その他、今後噴出する問題が多くある。「葬送の自由をすすめる会」が散骨を1991年に初めて実施した際、「散骨は墓地埋葬法の対象外」(旧厚生省)「節度をもって行われる限り問題ない」(法務省)と行政当局は説明したが、その後、参入業者も増え、トラブルの発生が懸念される。実際、散骨される場所の近隣住民とのトラブルが発生し、散骨禁止条例が施行された自治体(北海道長沼町)もある。現行の墓地埋葬法は、散骨のような新たな葬送方法を想定していない。なんらかのルール確立に向けた新たな立法化が必要であろう。

また、今後、墓の継承者のいない無縁墓の増大といった問題が深刻化するの間違いはない。さらに、増えていく献体ではあるが、献体として受け入れられる数にも限界がある。こうした諸問題に対する行政・法制上の整備は必要不可欠であろう。

註

- 1) 松本(中筋)由紀子の調査における、調査時点での年齢構成は以下の通りである。30代1名、40代4名、50代1名、60代4名、70代3名。計13名(松本[1996]中筋[1998])。

- 2) 「葬送の自由をすすめる会」会長の安田睦彦は次のように語っている。「自然葬に対する強い関心は、目先の社会的背景だけでなく、底流に日本人の伝統的死後観があるからではないか」(安田 [1992: 44])。「古来からの日本人の死後観のなかには、生きとしいけるものの魂の再生、循環、共存の思想があった」(安田 [1992: 44])。また、会のパンフレットでは、「伝統的葬法を復活させるとともに、自然の理にかない、環境を破壊しない葬法が自由に行われるための社会的合意の形成と実践を目指す」としている。
- 3) 井上治代は以下のような興味深い指摘をしている。

戦後、民法が改正され、家制度は基本的に解体された。しかしながら実は、現行民法の897条(祭祀財産の承継)の条項は、戦後の民法改正時に家制度廃止案を通すために家制度存続派(国家内保守派や右翼勢力など)の説得材料として存在したと、我妻栄をはじめとする起草委員たちが証言している。そういういきさつをもって、現行民法の897条に「慣習に従って先祖の祭祀を主宰すべき者がこれを承継する」という条項が今日存在する。この「慣習」と、墓を祭祀財産として代々承継するなかに、十分「家」が残ることが期待できたからであり、現実にならなっている(井上 [1993: 108])。

- 4) 山折哲雄は、「私の個人的な意見を申しますと、日本人の骨に対する執着心というのは、これは世界に冠たるものだと思いますね。世界のいろんな文化圏で、これほど遺骨に執着する民族はないと思うんです。しかもそれが単なる物質としての骨ではなくして、骨に靈魂が宿るという信仰です」と語り(山折ほか [1994: 44])、また、阿部謹也は、「例えば、アメリカのパールハーバーには、戦艦アリゾナが沈んでいる。日本軍によって沈められている。そこにアメリカの乗組員がそのまま眠っているのです。骨も拾っていないのです。日本人だと必ず骨を拾い上げようと言って、直後に拾い上げたと思います。五十年経っても、いまだに骨拾いに行くのですから、そこに死生観の根本的な違いがあるわけです」と語っている(阿部 [2005: 125])。

文献

- 阿部謹也 2005『世間への旅：西洋中世から日本社会へ』筑摩書房
- 井上治代 1993『いま葬儀・お墓が変わる』三省堂
- 1998「死ぬ：人生のターミナル」伊藤公雄・牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社
- 2000『墓をめぐる家族論：誰と入るか、誰が守るか』平凡社
- 2003『墓と家族の変容』岩波書店
- 2005『子の世話にならずに死にたい：変貌する親子関係』講談社
- 木下康仁 1992『福祉社会スウェーデンと老人ケア』勁草書房
- 松本由紀子 1996「現代日本の新しい葬法：『家の墓』意識と死後の自己決定の狭間で」『社会学評論』Vol. 47, No.2
- 森謙二 1993『墓と葬送の社会史』講談社
- 中筋由紀子 1998『死の文化の比較社会学：死を問題化する視線』東京大学大学院人文社会系研究科博士論文
- 波平恵美子 2003「死と葬送」新谷尚紀ほか編『暮らしの中の民俗学3 一生』吉川弘文館
- 2005『からだの文化人類学：変貌する日本人の身体観』大修館書店
- 大岡頼光 2004『なぜ老人を介護するのか：スウェーデンと日本の家と死生観』勁草書房
- 島藺進 2003「死生学試論（一）」『死生学研究』2003年春号
- 田中藤司 2003「墓」新谷尚紀ほか編『暮らしの中の民俗学3 一生』吉川弘文館
- 上野千鶴子 1994『近代家族の成立と終焉』岩波書店
- 山折哲雄ほか 1994『自然葬（季刊仏教別冊7）』法蔵館
- 安田睦彦 1992『お墓がないと死ねませんか』岩波書店
- 善積京子 1998「スウェーデン社会から学ぶ葬送」吉田正ほか編『「学び」の人間学』晃洋書房

(いの・しんいち 東京外国語大学非常勤講師)

Individualization of Family and Views of Death and Life

Shin'ichi Ino

New styles of Funerals and Cemeteries such as ashes scattering have emerged in Contemporary Japan. This change has been influenced by individualization of family. We can distinguish the two aspects of individualization : the change of family structure and the change of senses of family members such as the use of separate surnames by married couple. The change of family structure implies the nuclearization of family, smaller number of children, and the growing trend to remain single. The succession of Ie-Haka, family cemeteries became difficult.

This paper focuses on how people who live outside modern family such as unmarried persons construct views of death and life in making choices of styles of funerals and cemeteries.

Case studies reveal they are defiant toward Ie-Haka, family cemeteries, critical about funeral customs and not particular about the dead body and ashes. But they did not necessarily have particular views of death and life from the first. They rather construct views of death and life suitable to the style of uncustomary funerals and cemeteries they made choices of. Finally we can confirm considering death leads to living their better lives.